



ハビタット・ジャパン ニュースレター

第27号 2012年10月発行

世界の現場から

高校の教室を飛び出し、青空のもと築いた10日間。

立 命館守山高等学校(滋賀県守山市)の3年生26名(教員2名)が、今夏、8月17日、タイの玄関口、スワンナプーム国際空港に降り立ちました。目的は、首都バンコク郊外に位置するパトゥンタニ県(Pathumthani)における海外住居建築活動(グローバル・ヴィレッジ・プログラム、通称GV)。守山高チームは10日間程に渡り、地元住民と共に汗を流し、知恵を絞り、一軒の家の建築を行ってきました。

守山高校では、「国際人」を育て上げるための実践的な教育プログラムとして、高校3年生全員が参加する海外研修を実施。今回、ハビタットのGVがこの海外研修プログラムの一つに選ばれ、インターナショナルスクール以外では初となる高校派遣のGVが実現しました。

支援の現場で、汗まみれで学ぶ

「教室での学びを実践に！」を合い言葉に守山高チームは「まずはしっかり学ぼう」と、現地に赴くまで、半年という月日をかけてタイの社会や歴史、文化を学び、異文化を理解することができるベースをつくり上げてきました。しかし実際の現場では、そうやって学んだことがうまく生かせず、様々

な違いにぶつかって考え込む生徒の姿も。特に、現地の人々とのコミュニケーションの問題は大きく、当初はホームオーナーや現地の大工さんとの会話に不自由さを感じた生徒たちも多かった様子でしたが、建築作業が進むと共に、自然な会話や笑い声が増えていきました。「コミュニケーション＝言葉だけではない」ことを実感した生徒たちはそこから、全員が同じ目標に向かって一緒に汗を流し働くことの意味を理解。ワーク後も毎晩、チーム内で振り返りのミーティングを行い、自分たちが築き上げているものは何か、もっと自分を伝えるためにはどうしたらよいのかなど真剣に議論する姿が印象的でした。

チームが現地で築いた「みらい」

活動初日、ワークサイトには柱と屋根しかありませんでした。強い日差しが照りつく一方、突然スコールが襲ってくる環境。生徒たちは、「本当に完成するのか」と不安な表情を見せる場面もありました。しかし、チームと一緒に汗を流し、一日も早いマイホームの完成を望むホームオーナー家族の思いに応えたいと、生徒たちは最後までチームとしての集中を切らさず作業を続けていきました。



生徒たちは、「みんなが同じ目標に向かって一緒に汗を流し働くことは、作業の大変さを軽くし、ワークサイトがみんなの笑顔で溢れ、協働する楽しさを分かち合えるものでした。完成した家の前で、家の贈呈をして、みんなで写真を撮った時の達成感、一体感は決して忘れません」、「この活動に携わってくださった皆さんとの出会いに感謝の気持ちでいっぱいになりました。高校生という時期に、GVという素晴らしい経験ができたことに感動し、幸せを感じています」などと話してくれました。

今回チームが支援したのは一軒の家、そして海を越えた異国の地で生活する一つの家族の未来でしたが、同時に彼らは自分たちの未来もまた、切り開いて帰ってきたのかもしれない。

今夏、8月5日から11日の7日間、スリランカ西部の都市ネゴンボ(Negombo)にて、「リビルド・スリランカ(Rebuild Sri Lanka)」が開催されました。

アメリカやオーストラリア、ニュージーランドなど計6か国から約150人が参加。スマトラ沖大地震(2004年)の津波によって被災し、いまなおその影響を受ける家族のために、1週間で24軒の家を建設。日本からは42名(大学生36名、社会人6名)が参加。今回、12軒の建築に携わりました。

リビルド・スリランカは、ハビタット・スリランカが1996年に現地活動を開始して以来、同国内で17,000世帯以上の支援を行ってきましたが、いまだ解決されていない貧困住居問題への啓発とさらなる支援を目指して開催されました。



世界の現場から(2)

逆境から立ち上がろうとする家族と共に。

タイ北部:水害被災地で修繕支援を開始

水害によって昨年、甚大な被害を受けたタイ中北部。北部県の南端に位置するピッサヌローク県(Phitsanulok)では、半年にわたって浸水した地域もある中、多くのメディア報道にもあったように、政府の不十分な施策に加え、バンコク近郊の地域と違い国際的な支援もほとんど届かず、いまだ基本的な生活に必要とされる修繕すら見通しの立たない家族が存在しています。その多くが、貧困世帯、高齢世帯、寡婦世帯、病人や障がい者、乳児や多数の児童を抱える世帯など、いわ

ゆる社会的弱者層と呼ばれる人々で、水害後、避難所から自宅に戻りしはしたもの、「壁がない」、「トイレが使えない」、「家屋基礎の木材が腐敗し建物が崩壊しそう」など、安全面や衛生面で深刻な状態に置かれています。

ハビタット・ジャパンでは10月より、(特活)ジャパン・プラットフォームの協力の下、ハビタット・タイと連携して新たな支援事業を開始。ピッサヌローク県バーンラカム郡(Bang Rakam)を中心に、約半年をかけて50軒以上の住宅を修繕。特に支援を要する被災世帯

の居住環境を改善していく計画です。



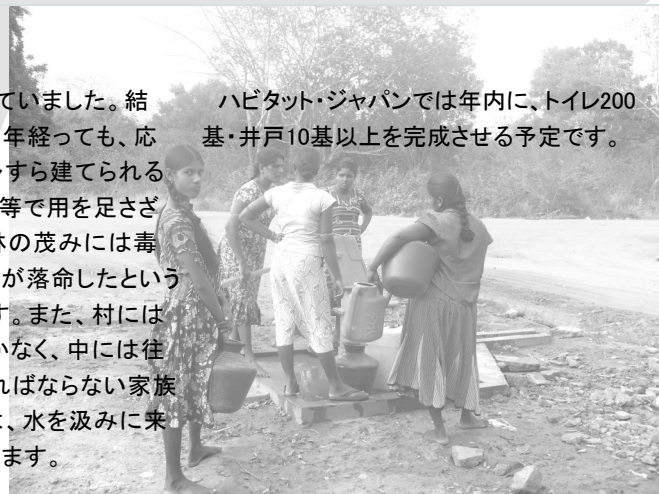
スリランカ北部:トイレと井戸の建設へ

紛争帰還民の再定住支援を行うスリランカ北部。7月、帰還民の水と衛生環境を改善するため、(特活)ジャパン・プラットフォームの協力を得て、井戸とトイレの建設を開始しました。

場所は2011年4月以降、101軒の住居建築を行ってきたマナー県。事業地の一つ、マントウエスト郡サンナル村(Sannar)では現在、200を超える家族が再定住を開始していますが、現地行政との間で土地問題が解決せず長い間、外部からの支援もほと

んど届かない状態が続いていました。結果、帰還して1年経っても2年経っても、応急的な住まいに共同トイレすら建てられないことはなく、住民は雑木林等で用を足さざるを得ない環境で生活。林の茂みには毒蛇等も生息しており、幼児が落命したという悲惨な事故も起きています。また、村には飲み水用の井戸が1基しかなく、中には往復で5km以上も歩かなければならない家族も。夕方など井戸の周りは、水を汲みに来る女性らでいっぱいになります。

ハビタット・ジャパンでは年内に、トイレ200基・井戸10基以上を完成させる予定です。



サマーファンドレイズ:この夏、CCが見せた被災地への思い

ハビタットの活動を全国的に支えるハビタット・ジャパンの学生支部(キャンパスチャプター:通称CC)。海外住居建築活動(GV)や東北ボランティアへの参加など、今夏も支援の現場で積極的に活動すると同時に、国内ではそれぞれの拠点で、東北被災地の復興を応援しようとファンドレイジング活動を展開してきました。

最も大きな取組みとなったのが、関西学院大学(三田キャンパス)CCによる「SHIFT 12」。企画名は、現在の東北=被災地というイメージをシフト(転換)させたいという発想から命名されました。7月、SHIFTに集ったメンバー41名は、まずハビタット・ジャパンの事業地の一つ、岩手県大船渡市を訪問。仮設住宅でのボランティア活動に参加すると共に、ハビタット・ジャパンが支援する家族を訪れ、生活再建に向けて取り組む人々の姿を心にしっかりと焼き付けました。8月、夏休みに突入すると、大船渡で結んだ全員の思いを実行に移し、地元三田や宝塚などで複数のイベントに出展。東北地方の郷土料理を販売するなど、東北をより身近に感じて

もらいながら被災地への応援を呼びかけました。

結果、募金活動分も含め1カ月で約75万円もの温かいご支援を頂きました。今年3月から半年をかけ、考え、悩み、夏の間中チーム全員で汗して尽くした成果でした。

今回企画リーダーを務めた千葉花子さん(関西学院大学2年生)は、「東北と関西、場所は離れていても、人と人がつながることでいろんな可能性が広がっていくのかもしれないですね」と取組みを振り返る通り、チームが被災地を応援したいという一心で集めた支援金は9月、ハビタット・ジャパンが大船渡で行う被災住宅の修繕に使われました。そして、2家族の生活再建に向けた可能性を実際に切り開いています。

その他にも8月上旬には、全国7つのCCが同日一斉の合同募金活動を実施。関西6か所、九州1か所の街頭で2日間、延べ150名が支援を呼びかけ、約40万円の募金を集めました。「集まった金額だけではなく、薄れつつある被災地への関心を、自分たちが伝えることができたのであれば…」と、今回リーダーを務めた佐藤亮さん(関西学院大学2年生)。現在すでに、冬の一斉合同募金を計画。着々と準備が進められています。



東西CC合同ワークショップ 2012開催

9月29～30日と、国立中央青少年交流の家(静岡県御殿場市)で、毎年恒例の東西CC合同ワークショップ(通称、御殿場合宿)を開催。過去最多の100名を超える学生が全国から参加し、「交流&理解:ハビタットのつながりを考える2日間」をテーマに、ハビタットの取組みについて学ぶと共に、参加者同士またハビタット・ジャパンのスタッフと交流を深めました。

ワークショップ最後のセッションで行った企画コンペでは、多くのチームが自ずと、支援の輪を他大学の学生などへ広げていくためにはいかに広報活動や企画を行っていくべきか議論。ユニークで具体性のある企画も紹介されるなど、有意義な2日間となりました。



「地球の歩き方」とコラボする一般募集チーム「Japan Hope Builders」(大学生15名、社会人3名)が8日間の建築活動を終え、9月10日に帰国しました。建築サイトは、昨年洪水で被害を受けたバンコク近郊のバットウンタニ県。今も家々の壁に浸水の跡が色濃く残ります。

チームが支援したのはパニダ(Panida)さん一家。これまで両親の家に居候、10人という大所帯でなんとか生活してきましたが、長女が生まれてからは子どもの将来を考え、最低限のスペースを確保できる住まいを望むようになりました。ハビタットのことを知り、支援を要請してから2年。ようやくこの日を迎えることができました。

ぼくらが築いた8日間

仲間に出会い、現地の人々の温かさに触れた
Japan Hope Builders 活動報告



【活動に参加して】岸勇輝さん(大学4年生・男性)

私は今回の活動に参加して、人の素晴らしさを感じました。少し前まで人があまり好きになれない時期もあったのですが、だからこそ、より痛切にその素晴らしさを感じたのかもしれませんが。これから自分が次のステップへ進むためのヒントも得ることが出来ました。パニダさん一家を含む素敵な仲間に出会えたことを誇りに思い、感謝します。

知って、考え、さてその次は？立命館守山高等学校で地歴公民科教諭として高校3年生を担当し「国際貢献」の授業を受け持つ田辺記子さんは、「実践する」場がない座学だけの授業に違和感を持っていた。そんな折、それまで英語・コミュニケーション能力の向上に重点をおいて実施されてきた海外研修旅行で「国際ボランティアコース」の新設を任された。

「これだ！」と、田辺さんは、日頃の授業を通じて生徒たちに伝えたかった「自分たちにもできる国際貢献」のチャンス在必死に探し、行き着いた先がハビタットの海外住居建築活動(GV)だった。多くの学生が参加し、活動を通じて成長して帰ってくる姿を目の当

りにして、心動いたという。ただし問題は、その参加者の多くが大学生であったこと。高校生の参加はそれまでにもあったが、日本の高校生チームの参加は初の試みで、学校派遣ということもあり大きな責任を負っていたからだ。それでも、長い準備期間を経て今夏、タイでの活動として実現にこぎつけた。(※活動の様子は1面参照)

しかし、ようやくスタート地点にたどり着いたのも束の間、今度は「高校生がこの活動を経験することの意義は？」と、新たな課題を感じたという。来年になれば生徒たちの多くが大学生になる。その気になれば、みな自分で行ける。今、行く意味は何なのか？

そんな疑問は、現地で活動が始まるとすぐに充実感へと変わっていった。そこには住居

建築活動を通じて、日々課題を解決していく生徒たちのたくましい姿があり、これから自身の将来と向き合い、進路を考えていく高校3年生だからこそ、必要な「実践」の場だったと確信できたという。

高校3年生という多感な生徒たちの変化は、かけがえない授業となると同時に、田辺さんにとっての、生徒たちを通じた国際貢献になった。



グローバルフェスタに出展

10月6日、7日、日比谷公園(東京・千代田区)で開催された、日本最大級の国際協カイベント「グローバルフェスタJAPAN」に今年も出展しました。



当日は、ハビタットの支援活動に加え、海外住居建築活動(GV)について大きく紹介。GVの特長や仕組み、参加する意義や面白さ、渡航までの手続きを、映像や資料だけでなく、運営スタッフ全員がハビタットTシャツやハビタットつなぎを着用するなどしてブースいっぱいアピールしました。会場では約200の社会貢献活動を行うNPO/NGO、企業、政府機関などが出展すると共に、約10万人が来場。世界の問題を自分の問題として捉え、活動してみたいと考えている人たちがたくさんいるということを改めて感じた2日間でした。

ハビタット・ジャパンでは今後も、国際協力への理解を広げ、そのような思いを持つ人々と、支援を必要としている人々をつなげていく活動を行っていきたいと考えています。



ハウスサポーター募集中！



指す「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現に参加することができます。

例えばスリランカでは、

- ・壁ブロック 1,000円/20個
- ・窓 3,000円
- ・ドア 10,000円、などで支援できます。



詳しくは近日公開予定の会員専用ページをご覧ください。電話、メールによるお問い合わせもお待ちしております。

東北ボランティア募集中！

引き続きボランティアを募集しています。1日から参加可能。特別な技術や専門知識は不要です！

【活動地域】

宮城県東松島市、石巻市、岩手県大船渡市周辺

【活動内容】

被災家屋の清掃(がれき撤去、解体)、コミュニティスペースなどの修繕、仮設住宅内での交流の場の提供・参加など。

【活動日程】

随時お申し込みを受け付けています。詳しくはホームページで！



編集後記

この夏、スリランカ北部で実施する事業視察のため現地を訪問しました。週末、たまたま一人でバスに乗る機会があり、ガイドブックで行先を探していると、一人のスリランカ人が、海外ではよくあるパターンで、「日本人か？」「どこまで行くんだ？」と声をかけてきました。ちょっと面倒くさいと思いつつも、会話をしていると、彼は今、日本のODA事業で道路建設に携わっていて、「日本人の仕事仲間にはすごくよくしてもらっているんだ。2004年の津波の時も助けてもらった。だから、日本人に恩返しをしたいんだ」と教えてくれました。ほんのひと時のたわいもない会話でしたが、支援は、どこかで巡り巡って返ってくるものなのかもしれないと感じる瞬間でした。(事務局)